

女性殺害の正当化、または加害者への自己同一視 『アメリカの悲劇』考 1

寺 沢 み づ ほ

1

若く野心的な男が、自分の出世の邪魔になるという理由で、彼の子供を身ごもっている女を殺害する事件を中心とした小説『アメリカの悲劇』(1925)の最大の特徴は、「主人公は無罪だ、もしくは無罪かもしれない」という解釈を、読者が作者によって強いられることである。綿密に書かれた、事件に至る経緯を読む読者は、主人公の著しい無責任さや不誠実や身勝手な自己中心性、および明白な殺意を見ないわけにはいかない。法的な有罪の定義がいかなるものであるにせよ、「シロかクロか」で言うならば「真っクロ」という印象しか持ちようがない主人公に対して、読者が「有罪」と感じることは、作者によって厳しく禁止され、「彼は無罪だ、もしくは無罪かもしれない」と感じることでしか許されない。一体これはどういうことなのだろうか。

並の長編小説の3-4冊分に相当するほどの、全編856ページの三部構成で成り立つこの長大な小説で、殺人事件が起こるのは第二部の結末である。事件に至る詳細な経緯がそこまで描き込まれ、そして第二部の最後で女は死亡する。それに引き続く第三部は、警察による捜査、主人公の逮捕、裁判、死刑判決と刑の執行までを描くのであるが、ここで二つの相反する流れが存在している。一つは、隠蔽や偽装や言い逃れをして罪を隠そうとする主人公を、追い詰め、偽装を暴き、有罪判決に持ち込む検察側の流れ——通常の推理小説や犯罪小説の謎解きの流れ——であり、もう一つは無罪を主張する主人公と弁護側の主張の流れである。裁判で、大半は事件の真実を言い当てる検察側と、真実とは違う言い逃れの筋書きを言い立てて主人公の無罪を主張する弁護側との対決で、検察が圧勝して、最終的に主人公は死刑台に送られる。第三部は、この意味では圧倒的に「主人公はクロ」の流れになっているはずなのだが、しかし作者セオドア・ドライサーは、この裁判結果を、偏見や偏狭さに支配された不当なものであるかのように描き、「偏狭な人々や社会規範は理解できないが、主人公は無罪ではないか」と疑問をぶつける態度を最期まで貫く。従って、読者が主人公は有罪だと感じたり判断したりするならば、作者によって「偏見」「偏狭」と意味付けられることになる形勢である。

後で詳述するが、この小説は現実起きた殺人事件をモデルにしているのと同時に、主人公を駆り立てる激しい衝動は作者の自画像でもある(勿論作者が殺人事件を起こしたわけではない)。主人公の無罪を言い立てる作者は、同時に彼自身の衝動の弁明や正当化も行っているわけで、無罪として

意味付けねばならぬ差し迫った必要性に作者は憑かれており、その必要性は、「主人公はシロ」の方向だけに向かわせるべく、事実の歪曲、筋道や論理のすり替えと混同などの、作者による情報操作を生み出している。作者による主人公の無罪強調や情報操作は、主人公を取り巻く偏狭な性道徳を批判するためだという弁護論も考えられるが、これが誤謬であることを本論では示す。こうした情報操作は必ずしも作品の弱点になるばかりでなく、巨大な迫力を生み出すことにもなっている。通常なら「クロ」であるはずの事態に対して、作者の言葉を膨大なまでに積み重ねて、強引に「シロ」の方向だけに記述を進める。身勝手な自己中心性や無責任な主人公に、何故作者は同一視し、膨大な弁明を積み重ねねばならぬ必要性に駆られているのか、その必要性和衝動の根本を明かすのが、今回『アメリカの悲劇』に取り組んだ目的である。

2

まず、作者による「情報操作」を明らかにしたいが、それを述べるには、事件までの成り行きを見なければならぬ。主人公の若者クライド・グリフィスは、生真面目で美しい女工ロバータに激しく恋慕し、直接に言葉で結婚の約束をしたわけではないが、女が結婚の約束と当然にも解釈する言葉をもって誘惑し、密かに性関係を結ぶ。その時点で彼女には決して漏らしていないが、「上流階級に入るに相応しい自分が、こんな女工ふぜいと結婚するわけがない」と、結婚の意思は皆無である。性関係を結ぶようになってしばらく経って、クライドは大金持ちの家の娘の美女ソンドラと親しくなると、この金持ちの娘と結婚して上流階級に入りたい夢に憑かれ、瞬時にロバータへの関心をなくして、金持ちの娘だけに激しく恋い焦がれるようになる。何しろ彼は、「金と地位のある人の仕事は遊ぶこと」(45)、「金持ちの世界は、安楽と輝きにあふれた世界」(228)と信じきっている男である。クライドは金持ち世界の一員になりたいという夢に憑かれ、自分が誘惑したロバータに冷淡になり、彼女との関係を切りたいと願うが、それはあまりに不当であるために言い出せない。一方ロバータは、あれほど自分を激しく愛していた男の突然の心変わりに悲しみ、苦しみ抜いた揚げ句に、「いつまで執着していても仕方ない。冷たくなった男と別れよう」と心を決めるが、まさにその時に自分の妊娠に気が付き、「別れれば済む」次元の話ではないことを悟る。

この時代のアメリカ社会の性道徳は非常に厳しく、婚姻外の性関係は絶大な罪悪として考えられていた（だからこそ、結婚を匂わせない限り、真面目なロバータがクライドと性関係を持つはずがなかった）し、未婚のままの妊娠などは「男に弄ばれ、捨てられた、売春婦にも等しい汚れた女」と意味付けられること、まともな世界の住人として生きる道を完全に断たれた、社会的な意味で「死刑宣告」にも等しい汚辱、自分のみならず、生まれてくる子供も自分の親兄弟も決定的な汚れのレッテルを負わされる深刻極まりないこと、「人生の完全破滅」であった。またこうした状況のもとで、妊娠中絶も法的に厳しく禁止されていた。ロバータはこの深刻極まりない「完全破滅」だけは避けようとして、クライドに「流産できる薬を手に入れるか、中絶手術を内密に引き受けてくれる医者を見つけるかして欲しい」と頼む。クライドも必死になって走り回るが、二ヶ月この解決法を掴もうと二人が

苦闘しても、どちらの解決法も掴むことができない。この時点で、ロバータはクライドに結婚を要求する。「私に対する愛がなくなっている以上、長期にわたる結婚をせよと言っているのではない。私が子供を出産し終えたら離婚してよい。とにかく、子供が結婚の中で生まれたという事実を作り、子供が父親の姓を名乗ることができる状況を整えさえすれば、子供と自分と親兄弟の名誉を保つことができるから、そこで離婚してよい。このように名誉さえ守られるなら、後は自分一人で子供を育て、あなたと無関係に生きてゆく」。しかし、この提案はクライドには受け入れ難い。ロバータには内密であるが、既に金持ちの娘ソンドラとの結婚の夢が実現の方向に向かっており、もし短期間であれロバータと結婚するならば、その夢が自動的に潰えるからである。しかし、彼はロバータの要求が正当であるだけに、拒否することはできず、「結婚はするが今は駄目。金ができるまで待つて結婚する」という言い逃れを繰り返す。

クライドはこの深刻な事態をどう解決するか考えることを放棄し、ロバータには「結婚準備のために実家に帰れ」と指示して目の前から去らせ、ただソンドラと遊び回り、金持ち世界の一員になる夢だけを考えている。その中でロバータ殺害計画が頭に浮かぶ。それは次のような計画である。結婚すると言ってロバータを旅に連れ出し、人気のない湖のボートに^{ひとけ}乗せ、ボートを転覆させて、全く泳がない女を溺死させよう、間違いなく溺死させるためには、女の頭を殴りさえすればよい（480, 484）、そして「身元不明の男女が乗ったボートが転覆事故を起こし、女の死体だけ上がったが、男の死体は湖底に沈んだままで見つからなかった」と人々に思わせておいて、自分は元の生活に戻ってソンドラと結婚する。この殺害計画を実行しようと、筋書きどおりにロバータと一緒にボートに乗るところまでいく。この時のクライドは、それでもって女を殴る予定のカメラを握りしめているが、いざとなると体が強張^{こわば}って、一撃が出せない。しかし、この逡巡の元になっているのはロバータへの同情などではない。彼の心は、自分をここまで追い込んだロバータへの激しい憎悪と嫌悪に満ちており、「絶対にお前なんかと結婚しないぞ」と心の中で叫び続けている。彼の表情の異様さに気付いたロバータが心配して近寄ってくると、彼は嫌悪のあまり女の顔をカメラで強く殴ってしまう。倒れた女に、殴るつもりではなかったと弁明しようと彼が立ち上がった時、ボートが転覆して二人は水中に投げ出されるが、彼は助けを求める女の叫びを無視し、「故意ではなく偶然に殴っただけなのだから、自分は無罪だ。こういう形で解決するとは嬉しい」と感じて、一人岸に泳ぎついて逃走する。

ロバータ殺害後の第三部で、逮捕されたクライドは、罪を逃れようと様々な嘘をつくが、自分で自覚している嘘と自覚せずにつき通している嘘があり、その後者の嘘は作者による情報操作のありようを明示するものなので、具体的に説明しよう。次の引用は、彼が弁護士と初めて接見する際に、事件の説明をする場面である。

同時に今ではクライドも、極めて正直に、時にはロバータも気立てのよい女とは別の気性を発揮することもあった事実——実態は非常に非妥協的で頑固ですらあったこと——を指摘しだした。今結婚を強要されたのでは、自分は社会的にもあらゆる意味でも破滅することになるという訴えにも、こちらは働いて生活費の仕送りをするつもりだったのに、全然耳を貸そうとしなかった

——そういう彼女の態度が今回のような事件を引き起こすもとなったと思うと、彼は述べた。

(633)

彼は、自分は断じて結婚の話など一回もしなかったと嘘の主張を言い張った上で、自分の側の破滅ばかりを気にしていて、ロバータが被ることになるそれより遥かに深刻な破滅のことなど、一片の顧慮も払おうとせず、あたかも彼女には結婚以外のとるべき道があったのに、「頑固さ」でそれを拒否したのだから責任は彼女の方にあるという身勝手な主張をしている。勿論これは実態とは異なる話で、実際は次のような事情であった。自分が金持ち女性との結婚を考えていることをロバータに直隠しにするクライドは、中絶できない段階になってロバータが出してきた結婚要求を退ける理由が（本当の理由を隠している以上）なかなか思いつかなくて、「もう少し待って、相当の地位に就いてから、結婚したいんだ——多少は金を貯めてね」（434）と言い逃れ、結婚の意思そのものを否定してはいない。続けて（これを口にするのはこの一回だけであるが）「もし君が、身体の方が片がつくまで、しばらく一人でどこかへ行く気になってくれるなら、その費用は僕が送れると思うんだ」（435）と提案するが、この提案は、女だけを決定的な汚点を負う「人生の破滅」に突き落として、自分は無関係を決め込もうとする身勝手さと無責任さの態度であり、女は怒って提案を断るし、男はそれ以上は何も言えない。以後、ロバータの要求が正当であるだけに断ることはできず、その場逃れの「もっと先に結婚する」という言葉を与え、自分は結婚式の費用を稼ぐために働くから、お前は「結婚のための衣装を作れ」（448）という理由で実家に帰し、こうして貯めた金は全部金持ち女との遊びに費やし、そして「絶対にロバータなどと結婚しない」決意を押し通すためには、彼女を殺すしかないと思い決めるに至るのである。

しかし、第三部では先に引用したとおりの、「どこか遠くで一人で未婚のまま子供を生んで、自分を『解放』してくれるようにと懇願したのに、女が頑固に拒否したことが悪い。不当な結婚要求という束縛から、『自由』になろうとしたただけだ」という内容の話が、私の目に付いただけでも15回繰り返される（633, 639, 704, 720, 725, 725-6, 726, 726, 727, 727, 727, 729, 733, 755, 759）。同じページ数が複数あるのは、一ページのうちに複数回主張されていることを示す。弁護側が無罪主張の根拠にしているのも、こうした状況説明である。作者ドライサーもクライドも、これが嘘だとは明確に自覚せずに言い募っているが、これは明らかに嘘である。クライドはロバータに対して言い出せなかったが、彼の心の中では、女が一人で「身の破滅」を背負い込んでもらいたい、その提案を拒否されては困ると思え続けていたという意味では、この説明は括弧付きの「真実」だとも言えない訳ではないが、しかし、これはあくまで男の口には出せなかった身勝手過ぎる願望であって、事実経過の有りのままの説明などではない。ところが、第三部ではこの主張が15回も繰り返され、そして「嘘でも繰り返し言い立てれば、事実としてでっち上げられる」という現象がここで生じている。そして「死人に口無し」の諺どおり、自分と子供の切実な人生破滅を回避しようとした女の切望は、安楽を手に入れなければ身の破滅だという男の身勝手で声高な主張の前に、読者の目からも見えない所に追いやられる。このように作者によって操作された状況の意味付けが、第三部の基調になっている。読

者に対して、意思に反した結婚を「強要」する女の不気味さだけが強調され、彼女を殺人という形で処分しようとする男の歪みが、「自由」「解放」の探求というヒューマニズム語だけで美化され、正当化される。

クライドはドライサーの自画像の一部であり、クライドの思慮を欠いた欲望の発露は、作者ドライサーによってほぼ全面肯定されている。ドライサーは「クライドの感情や、人生に対する彼の原始的で動物的な反応は、何物をもってしても変えさせることはできない」(Warren 166)と述べ、宗教や道徳や教育が矯正することなど不能な、人間本性であると意味付けて肯定し、さらにこれを特異な「正義」の基盤にしている。

今指摘した点は、第三部に見られる作者による情報操作の一つに過ぎない。クライドは頻繁に嘆くが、自分がロバータを死なせたことを後悔することは皆無で、嘆く内容は首尾よく犯罪をやりおせなかったこと、逮捕・起訴されたことへの不安、ソンドラ喪失の悲嘆、死刑の恐怖、「誰も理解してくれない」という自己憐憫などの方向だけであるが、弁護士と作者によって「泣くのだから、この男は悪人ではない」という短絡的な判断が繰り返され、これがクライド無罪説のさらなる根拠に仕立てられている。作者にとってクライドが「有罪」であってはならず、事実と違うことを15回も繰り返すなど(他の繰り返しも多い)、とにかく膨大な記述の積み重ねをして、「偏見と偏狭によって、無実であるのに死刑にされた男、誰にも理解されない男の悲劇性」を打ち出そうとしている。この小説の情報操作についてのさらに詳細な説明は、拙論『『アメリカの悲劇』考2』で行う。この小説は856ページという希有な長さのものだが、実は下書き段階ではこの倍の量があって、推敲段階で半分に削ったという。作者が抱える、「無罪」の方向に強引に持って行かねばならぬ必要性が、積み重ねの上にさらに積み重ねる記述方法をとらせたと見えよう。この小説で、クライドの行為は「自由」「解放」「人間的」というヒューマニズム語だけで説明されるため、従来の文芸批評はこの「ヒューマニズム」に同調し、礼賛するものがほとんどである。文芸批評は今なお、偉大な作家は普遍的なヒューマニズムを表現しているはずという根拠皆無の妄想に呪縛されきっているため、このような批評ばかりが書かれ続けている。そして、この「ヒューマニズム」が、被害者の苦しみや切望を不可視の領域に追放した上に、ようやく成立するものであることは、ほとんど顧みられることがない。何故ドライサーはこのような加害者への同一視にかくも強烈に憑かれることになったのだろうか。

3

19世紀末から20世紀初頭のアメリカで、性と恋に関わる扇情的な女性殺害事件が立て続けに起こった。ドライサーはこれらの殺人事件に異様とも思えるほどの関心を持ち、膨大な資料を集め、そしてこれらを題材に小説を書こうと十数年も執拗に試みていた。まずモリノー事件(男が恋敵を毒殺しようとしたが、無関係の女性がその毒を薬と間違えて飲み、死亡した事件)について書き始めるが挫折し、次にオーベット事件(男が、結婚の邪魔になった元恋人を毒殺した嫌疑で起訴さえるが、無罪になった事件)を題材にするが、これまた挫折してモリノー事件に戻って再び取り組み、また挫折

してリッチソン事件（牧師のリッチソンが、上流階級の娘との縁談と昇進の邪魔になるという理由で、妊娠している元恋人を殺した事件）をモデルに描き始めるが、6章から先が書けない。現実の女性殺害事件をモデルに描いては挫折するこうした4回の試みを十年以上続けた果てに、1923年になって初めて、ジレット・ブラウン事件に題材を移し、そして今回は書き始めるや否や一気呵成に長大な小説『アメリカの悲劇』を書き上げた。現在『アメリカの悲劇』と言えば「ジレット・ブラウン事件」と反射的に答えるほどに、事件は作品と一体不可分になっているが、作者が当初は長期にわたってこの小説をモデルに取り上げることを回避し続けていたとは意外と思われるだろう。会社の上司（チェスター・ジレット）が、妊娠させた部下の女工（グレース・ブラウン）を邪魔者として溺死事故を偽装して殺したという物語の枠組みは、ジレットの事件をそのまま小説に使っているが、ジレットの場合には社会的上昇の情熱が欠如していたことをドライサーは不満に感じ、なかなかこれをモデルにしようとしなかった。しかしいったんこの事件をモデルにするや否や、ドライサー自身の社会的上昇への渴望を主人公像の中に強烈に注ぎ込むことになった。

これらの女性殺害事件を題材に執筆に苦闘していたのと同じ時期に、ドライサーは、殺しはしないが、女性や子供の死を切望する物語を幾つも書いている。これらはドライサー世界解明の鍵を与えてくれるものであり、少し遠回りになるが、概説してみよう。

まず短編小説「自由」である。この短編の主人公は、ニューヨークに住む60歳の裕福な建築家で、今重態に陥っている妻の一刻も早い死を切望している。全編32ページの短編の30ページ目でようやく妻が死んでくれるまで、妻に対する呪詛に満ちた不満が延々と述べられる。曰く、幼馴染みで瑞々しかった彼女に惹かれた主人公は結婚の約束をし、数年後にその約束を履行したが、結婚以来一瞬たりとも幸せではなかったと言う。妻は子供を生むたびに容色が衰え、世間にはそんな妻より若く美しい女はたくさんいて、そのような女に魅了され、恋愛したいという衝動に駆られることも何度もあったが、既婚者である自分の立場を考え、超人的な我慢をしてその衝動を辛うじて押し殺してきた。「恋愛は一生に一度だけ」(46) などという道德基準はなんと残酷かと彼は呻吟する。ここで描かれるのは、妻との生活を保ちながら他の女とも遊びたいというような、ありふれた浮気願望とは全く異質の、妻に消滅してもらいたい切望、すべてをリセットせずにはいられない切望である。不幸な結婚生活の原因は妻だけにあると夫は言う。妻は芸術家である夫を全く理解せず、旧弊な道德と俗物根性の塊で、子供にもその俗物根性を吹き込み、夫の友人関係も破壊したという。しかしこの夫は外見だけで女の価値を決め、容色が衰えた女は排除したいというのだから、たとえ次の女を獲得したとしても、その女にも早晚飽きることは確実である。この結婚の不幸の原因は、妻の個人的な特性ではなく、夫の欲望のあり方にあることは、読者にの目には明白である。

友人関係にしても、結婚せずに様々な女との深い関係を楽しんでいる友人が、この夫よりも遥かに芸術的才能を評価され、成功を収めていることを羨み、自分がそうなれなかったのは妻のせいだと決め付け、この友人を「妻さえいなかったら実現していたはずの、あるべき自分の姿」としている。魅力の失せた妻を排除すれば、必ず若い美女が獲得でき、必ず成功できるという図式に、完全に夫は凝

り固まっている。よってその実現を阻んでいるのは妻で、妻の座を去ろうとしない彼女は夫を不当に拘束する許し難い人物だと言う(妻は夫の不満を全く知らず、オシドリ夫婦だと信じている)。一方でこの夫は、「自分があの友人のように道徳を無視した生き方をし、妻を遺棄していたなら、クライアントにも見捨てられ、社会的に葬られていただろう」(56)とも述懐するのだから、夫は保身のために結婚生活を続けているわけで、保身と野心は整合しない。しかし夫は、妻が死にかけている今こそ「囚われ」状況から「解放」され、「自由」と成功を達成するチャンスだと妻の死を願う。30ページ目でようやく死んでくれて(一時は持ち直しそうで、夫は気が気ではなかったが)、喜んだのも束の間、鏡に映った自分の60歳の顔を見て、もはや若い美女を獲得するには老いばれ過ぎている、自分の失われた人生は取り返しようがないと嘆くところで小説は終わる。

同じく短編「昔暮らした街」は実際に妻を遺棄する男の物語である。主人公は若かった時に美しい女性に激しく惹かれて結婚し、二人の子供も生まれたが、貧しい生活の中で、結婚したことも子供を作ったことも強く後悔し、子供さえ死んでくれれば自由になれるのにと、心密かに願う。それに応えるかのように、二人の幼子が流行病で相次いで死ぬと、悲しみのどん底にいる妻に、「成功するために大学に進学する。卒業の目途が付いたら迎えに行くから実家に帰れ」と指示するが、本心では既に妻を遺棄する決意を固めている。進学すると、妻への連絡を断ち、やがて成功への道を歩み始めた彼は、新たな結婚もして裕福な身分になっている。最初の妻を捨てて25年後に、昔貧しい結婚生活を送った街を訪ねた夫は、妻が極貧と孤独のうちに死去したことを知り、成功の夢がもたらす残酷さを悟って立ち去る。この結末は、妻を遺棄したことへの罪悪感もほの見え、短編「自由」とは逆の内容かと見えるかもしれないが、実質は同じである。「妻と子供を捨てたら、新たな女と成功が獲得できる」という図式は同じであり、「昔暮らした街」の夫がもし妻を捨てていなかったとすれば、短編「自由」の夫よりもさらに激しい呪詛を妻に浴びせることになるのは確実である。「昔暮らした街」の主人公が妻への罪悪感を抱けるのは、妻が死去しているからに他ならない。

また『アメリカの悲劇』に先立って出版された自伝的長編小説『「天才」と呼ばれた男』において、主人公は女性遍歴を繰り返すうちに、生真面目な美人小学校教師のアンジェラと知り合い、強く惹かれて求婚し、性関係を迫るが、彼女は結婚以前のセックスを許そうとはしない。婚約中も、婚約者アンジェラに隠れて激しい女性遍歴をさらに重ねた揚げ句に、結婚に至るが、結婚には程なく幻滅し、気持ちは離れた妻との激しい性生活を享受しながら、数多くの女たちとの性愛に向かう。妻を捨てようとしても、妻は彼を自由の身にしてくれない。次に美少女スザンヌとの恋愛と破綻の顛末という重要なエピソードが入るが、それは端折って妻の死に話を進める。愛していない妻が妊娠すると、彼は生まれる子供のことを考えただけでむかつき、ひたすら妻の死を願う。願い叶って妻が産褥で死ぬと、自由になった夫は芸術家として大成功を収める。実際のドライサーの妻が妊娠しなかったことと死んでくれなかったことを除けば、この妻の像や恋愛沙汰は、概ね彼の女性関係そのままを写し出している。

以上の三編のすべてにおいて、「妻(飽きた女)を捨てること」＝「新たな若い美女の獲得」＝「男

の才能の開花と世俗的成功」が、疑念の入る余地なく完全に一体化されている。今の図式の中の「新たな美女」もしばらく時間が経てば、「捨てられるべき女」になり、男はさらなる美女とさらなる成功（アラビアン・ナイトの豪華絢爛さにしばしば比せられる）を無限に追い求めることになる。これがドライサーの人生観／世界観の核である。よって獲得し損なった女は、永久に美化される。常識的に考えれば、こんな生き方がスナリ実現するはずがなく、男の立場は頻繁に危機に晒される。例えば、上記の自伝的小説の中のスザンヌとの恋愛沙汰は実体験に基づいているが、その体験とは、まだ作家としての地位を確立しておらず、編集者としての稼ぎで生活していた時代の39歳のドライサーを危機に晒した恋愛である。彼は他では望めない高給をくれる或る出版社での編集の仕事を運良く掴んでいたが、同社の重役級の編集者(故人)の娘で、まだ17歳のテルマを誘惑して駆け落ちを企てる。妻と離婚していないのに、分別のない年齢の少女相手にこのような振る舞いをしたことが露見し、彼はその娘と引き離されるのみならず、職まで失うことになった。それでもなお、ドライサーはこの図式の価値観を手放すことができないし、これに疑念を抱くこともできない。このような恋愛では、相互理解を当初から否定し、持続的な女性との関係が全く築けず、永久に渴望は満たされることはないし、永久に他者を傷つけて人間関係を破壊し続けるのだが、それに疑念を持つことが絶対にドライサーにはできない。こうした図式に囚われた彼の小説の主人公たち、例えばクライドは、頻繁に「理解してほしい」と言うが、その「理解」とは相互理解のことではなく、クライドに同情・共感・支持を寄せることでしかない。この小説は読者にこうした「理解」を要求している。

こうした特異なドライサーの女性観は、「私は女を、人間としてではなく、快楽をもたらす『装置』としてしか見られない」(Warren “Introduction” 538) という言明によっても確認できる。と言っても、彼の恋愛が遊び半分だという訳ではない。後述するように、女を獲得できるか否かに彼の自我の存否がかかっているため、常に目の前の女を激しく恋慕し、嘘をつきまくっても相手の心を自分に向けようと頑張り、そして性関係を迫る。しかし彼の熱意に動かされ、彼の孤独や無力感を体と心で慰めてくれるようになる優しい女は、セックスを獲得した途端に蔑むべき対象（使い捨てして良い女）となり、度し難いナルシシストの女、自分だけしか愛さずに体を許さないソンドラのような女こそが、尊敬を含めた崇拝の対象になる(630)。こうしたセックス観／女性観を見ても、1960年代以降の性革命精神とは「似て非なるもの」であることがお分かりだろう。ドライサーの「恋愛」は激しい情熱恋愛の様相を示すため、ロマンチックな本物の恋かと勘違いしがちだが（そしてドライサー自身がこのような恋愛しかできないため、疑念を持てないのだが）、セックスのための恋愛、女を遺棄するための恋愛であることを、見逃してはならない。ドライサーにとって、このような「恋愛」を阻むものはすべて——人物も社会道徳も宗教も——、許し難い「偏狭な悪」に意味付けられ、それらは「敵役」だけに固定される。

「飽きた女の排除」＝「新たな美女の獲得」＝「さらに大きな、男の才能の開花と世俗的成功」という図式の中では、男に遺棄されることに同意しない女は、男に彼自身の意思に反することを「強制」し、男の可能性を叩き潰し、男を不当に「囚われ」の身分に閉じ込め、「自由」と「解放」という「人

間的」な欲求を押し潰す許し難い存在、呪詛すべき存在、排除して当然（殺したくなるのも当然）の存在にしかない。そしてこの図式の観点に立つならば、他者（女）の苦しみや悲しみや言い分は徹底して不可視の領域に追放したままでおかねばならない。自分の側の「自由」と「人間性」が大事で、女（被害者）の側の自由や人間性や尊厳などは、無視して当然なのである。「結婚の至福」などを口にして女を誘惑し、セックスに使用したら、また妊娠したら、用済みで、廃棄（遺棄）することを、「自由」として称賛するドライサーの世界において、女は実際に殺されなくても、「セックスに使用した後に遺棄される」ことは、社会的な信用や名誉の点では「死刑判決」（殺される）に等しい。『アメリカの悲劇』のロバータに対する殺害と、殺害に関する無罪主張も、こうした一連の固定観念の中に存在している。

4

何故ドライサーは、このような特異な固定観念を固守することになったのかの原因は、多くの人が指摘するように、彼の姉たちが起こし続けたセックス・スキャンダルに起源があることは間違いない。従来多くの批評家は、「姉たちがスキャンダルを起こし続け、セックスによって人生が決定づけられる様を見て、若いドライサーはセックスの重要さを認識し、自分も姉たちを弄んだ男のようになりたいと思った」と説明し、これがスナリ理解できる自然な反応であるかのように言い、これに何等考察を加えようとしていない。しかし姉たちが受けた無慈悲で屈辱的な扱いに対して、まず、相手の男に憤るのが自然な反応ではないだろうか。実際ドライサーもこうした怒りを持ったはずであるが、その怒りが奇妙な形で否定され、不可視の領域に追放される。何故、そしてどのように、こうした逆転が生じたのだろうか。

ドライサーの家族について概略を述べてみよう。それぞれ移民としてアメリカに渡ってきた彼の両親は、「アメリカの夢」を実現するどころか、反対に極貧状態に留まるしかなかった。夫婦は「貧乏人の子沢山」の言葉どおり11人の子供をもうけ（そのうち3人は幼児時代に死亡している）、ドライサーは下から2番目の子供であった。一家は時として食料や石炭などの生活必需品を買う金にも事欠くほどに貧窮していたが、厳格なカトリック教徒である父親は、それを改善する力もないまま、「怒れる神が与えたもうた試練」として現状を甘受することを子供たちに強いた。子供たちは皆、そのような親に反発し、所謂「黒い羊」のような人生ばかりを選んだ。長男ポールは、司祭になれという親の期待に背いてボードヴィル一座に身を投じ、やがて流行歌の作詞家として大成功を収めるが、女郎屋経営者の女性のヒモとして暮らすなど、女性関係の面では放浪を繰り返した。次男ロームは犯罪を犯して投獄されるなど、「札付きのワル」で、家族の頭痛の種だったというのが、次の話は凄まじい。彼は自分の妹たちを無理やり「男友だち」（ロームの友だちなのか、妹たちの友だちなのかは不明）や、「男友だちの父親」のところに行かせ、「貧しい我が家を援助してくれと嘆願したり（と言っても、その金はロームが独り占めしていたのだが）、恐喝まがいの態度をとったりして、彼等から金を取っていた」し、そのようにして金を取られたシルスビー大佐は「歴史上、最低の家族だ」と言ったという

(Moers 218)。この妹たち（ドライサーにとっての姉たち）が、無理に送り込まれた男たちのもとで現実に何をされたかは不明だが、「秘密の性的な遊びの道具」という意図で送り込まれたことは間違いない。ついでながら、シルスビー大佐は『ジェニー・ゲルハート』に登場するブランダー上院議員——十代の貧しいジェニーに同情して金を与え、彼女と結婚するつもりで妊娠させるが、結婚を果たさないまま急死し、ジェニーを未婚の母にしてしまう 50 歳代の上院議員——のモデルだそうである。

おそらくこの後であろうが、姉妹は次々にセックス・スキャンダルを起こす。長女のメイムは金持ちの男と性関係を持って妊娠するが、その段になってわずかな金を持たされて追い払われる。これがいかに深刻な不名誉、人生の破滅になるかは、既に述べた。次女のエマは、シカゴの建築業者の愛人であった時に、別の妻子ある中年男と駆け落ちするが、この男が駆け落ちの際に勤務先の金を盗んでおり、当時新聞がセンセーショナルに書き立てる一大スキャンダルになった。三女のテレサも十代のうち（勿論未婚である）から複数の男と性関係を持ってスキャンダルになったし、四女のシルヴィアも長女と同様に、金持ちの男に妊娠させられて捨てられ、インディアナ州の地元で出産するのはあまりに恥多しと、遠くニューヨークまで送り出された。極貧であることに加え、こうしたスキャンダルを起こし続けるこの一家は、地域社会から白眼視されていた。何故一家の娘たちが、姉のスキャンダルを反面教師にすることなく、性懲りもなく同じことを繰り返すのか不思議に思うが、兄ロームによって性的玩具の身分にされたことも一因になっているのだろう。そして親はこの事態に対して完全に無力であった。

姉たちがこのようなスキャンダルを起こし続けていたのは、ドライサーが 8 歳から 13 歳くらいの時期——自我形成の時期——である。一方『アメリカの悲劇』において、クライドは 12 歳の時に、貧しく、人々から蔑まれている親を見て、「自分はこんな家族よりも上等な人間であるはずだし、そうあるべき」と、家族を蔑み、意識では家族と訣別する形の自我を形成する。そして 16 歳の時に姉のセックス・スキャンダルを経験する設定になっており、自我の目覚めと姉の事件が別の事項になっている。8 歳から 13 歳のドライサーは、16 歳のクライド——既に良い身なりを整えることができる高収入の仕事を持っている——よりも遥かに幼く無力だったはずである。そんな無力な彼が、貧困と姉たちのスキャンダルに同時期に直面し、自分も白眼視される状況で何を感じたかの一端を、『アメリカの悲劇』の第一部 13 章から 14 章にかけての記述に見てみよう。

クライドの姉エスタは旅回りの芸人との駆け落ちによって、貧しく惨めな家からの脱出を図るが、結婚する約束で彼女を連れ出した芸人は、結婚しないまま各地のホテルを転々とした後、ピッツバーグのホテルに（ホテル代も支払わないまま）無一文の彼女を置き去りにし、その時既に彼女は妊娠してしまっていた。女は男を結婚相手と信じたが、男は彼女を性的に使用した後は、ホテル代まで押しつけて、遺棄して顧みることもない。裏切られた苦しみと悲しみ、払えないホテル代金、屈辱、愚か者という烙印、そして何よりも取り返しがつかない妊娠まで、自分一人だけに負わされている。未婚のままの妊娠とは、恥辱の極み、墮落の極みとして、もはや家族のもとへさえも帰れない事態であった。この悲惨な話をクライドが姉から聞くのが、次に示す場面である。「何という惨めなことだ」、

「見知らぬ土地に無一文の姉を放り出しておいて逃げるなんて、何とひどい奴がいるものだ」、こういう女を以前物笑いの種にしたことがあったが、「今や自分の姉がその当事者だった。自分の姉をそんなに手軽に扱う男がいるとは」、「自分はなんという情けない一家に属しているのだろう。いつも貧乏で、こんなひどい扱いを受けるほどに、世間から見下されている」（98）と彼は感じる。姉が被った残酷なほどに手酷い裏切り、騙され、弄ばれ、見捨てられ、さらにはお笑い草（嘲笑の種）にされたことへの憤りと悲しみと痛み、これらをクライドも感じており、そして姉への共感を感じることで自体が、自分もそのように見下されるグループの一員なのだという認識を引き起こし、苦痛になっている。

しかしそれを打ち消す思いも即座に彼の中に沸いてくる。「姉をあんなふうは無慈悲に見捨てた男に憤りを感じると同時に、姉にも全然罪がないというわけではないという気がした」（98）、「セックスそのものが間違っているわけではなく、思慮のなさや知識のなさから生じる結果だと、彼には思えた。エスタにしても、関心を抱いた相手の男のことをもっと良く知っていたら、そういう男と関係を持つことの結果を悟っていたならば、今の哀れな状況に陥らずに済んだはずである」（99）と、姉の思慮のなさを指摘することで、姉への共感を放棄し、すぐに姉への加害者（自分達家族に対する加害者でもある）の方に、共感を振り変える（「セックスそのものが悪い訳ではない」という記述に明らかになっている）。勿論クライドが言うように、姉に思慮が欠けていたことは確かであるが——そして恋の最中では大抵の人が思慮を欠けているのだが——、思慮が欠けた人間に対しては何をやっても許されるという訳ではない。勿論、こんな惨めな人間が自分の身内だと思えば情けなくてやりきれないとして、自分と切り離そうとしたい気持ちは充分理解できる。しかし興味深い点（不可解でもある点）は、そのような痛みを感じさせられた者として、「自分はそのような無慈悲なことは絶対にやらない」と決意する選択肢も存在するはずだが、それを考える暇もなく、別の選択肢——姉を弄んだ男と同じことをやりたい、やらずにはいられない——に飛び付くことである。

その点について述べる前に、先の引用へのコメントを加えたい。思慮のなさを理由に姉を咎めるクライド本人が、姉より遥かに深刻に思慮が完全に欠落した生き方を続けている。彼は全編を通してほぼ完全に、予測される結果を考えることを放棄しており、彼を描く場面では「考えない」という記述だらけである。その最たるものが、ロバータを欺いて避妊もしないまま性的関係を続けたらどうなるか、ロバータとソンドラの間で、問題を「考えずに」放置したままにしておいたらどうなるか、邪魔になった女を殺害すればいいという考えがどのような結果をもたらすかである。自分こそが完全に思慮を欠けている人物でありながら、女の思慮のなさを理由に、その女を不公正に使用することを容認している。そして作者ドライサーは、「彼の感情や、人生に対する彼の原始的で動物的な反応は、何物をもってしても変えさせることはできない」という言葉に明示されるように、主人公の思慮のなさを正当化している。これは露骨過ぎるダブル・スタンダードであるし、『アメリカの悲劇』にはこれと同種のダブル・スタンダードがたくさんある。

当初は姉に向けていた共感を撤回して、姉（そして自分たち家族）に対する加害者に共感と同一視を向けるという成り行きは、アンナ・フロイトが説く「加害者への同一視」によって説明できる（ま

た次の論で詳述するが、この「加害者への同一視」は、もう一つの精神分析の理論で、誇大自己像への執着を解明する「ファミリー・ロマンス」と一体不可分である）。フロイトによれば、ひどい脅威に晒され、そして自分がそれに対処しようがなく無力である時、人間はしばしば被害者である自分の実態を否認し、自分に対する恐ろしい攻撃者（加害者）に同一視を向けることで、恐怖や無力性や屈辱を克服しようとする。勿論これは偽の対処法であって、根本的には消滅していない自分の実態を軽蔑し、実態から強迫的に逃れようとするばかりになる。繰り返される姉たちのスキャンダルや、それに伴う白眼視が、無力な子供にとってはいかに脅威であったかは、そしていかに自分の立場が受け入れ難いほどの屈辱であったかは、容易に推測できる。それを逃れるために、加害者と自分を同一視するし、加害者と同じになることに、自分の自我の存否を賭けるようになる。苦痛極まりない事態に対して、親が完全に無力であるのだから、幼い子ども（ドライサー）には、「加害者への同一視」しか逃げ道が存在しなかったからである。

ここまで本論で述べてきたドライサーの特質は、全部が「加害者への同一視」とぴったり合致する。クライド（そしてドライサー）が、被害者が抱いた切望や、遺棄された後に経験する巨大な苦しみを完全に不可視の領域に追い出し、露骨過ぎるダブル・スタンダードを駆使するまでしても、断固としてそれを見ようとしないうこと、加害者の側の「自由」と「解放」だけの強調（遺棄する権利の正当性の強調）、「女の遺棄」＝「新しい美女の獲得」＝「さらなる成功の約束」の図式に凝り固まっていること、体を与えた女への見下し等々。女の遺棄が、自分の社会的地位を高めることに直結しているのは、金持ちゆえに姉を遺棄した男に自分を同一視させることであり、このようにして自分の屈辱と無力さを否認し続けるため（自我を保持するため）には、被害者の苦しみが見えてはならないし、見えても断固として否定し、嘲笑的に否認しなければならない。事実クライドは、自分が誘惑し、妊娠させたロバータを遺棄しようする時、「彼女を深く深く傷つけて、それで彼女が死ぬことになっても、全く構わない（そんなことを気に掛ける必要は一切ない。だって僕は結婚するなんて一言も彼女に言ってないんだから）」（382）とまで考えて、自分の責任と関与を全否認し、相手を一片の顧慮すら払う必要がない存在として見下し、そして自分を正当化する。

さらに注目してほしいことは、こうした衝動の強迫性である。クライドは、新しい美女を目にするのが欲しくて居ても立ってもいられないほどになる自分が、他の人々の欲望のあり方と違うと感じており、「自分は女に対して常軌を逸した（abnormal）欲望を持っている」（239）と語るし、さらに、何故自分以外の人たちは、自分が屈せずには居られない性的欲望に屈せずに自分を保持できるのか、不思議だと思っている（825）が、それは他の人々は、彼のような「加害者への同一視」という強迫観念に憑かれていないからである。彼は個々の欲望達成が、現実に関与にどのようなプラスになるか否かの判断は皆無のまま、ひたすら図式だけに憑かれて突き進む。次の女が見つければ、今の女は瞬時に嫌になり、さらに次の女が見つければ、あれほど頑張った女が瞬時に嫌になり、消滅してもらいたいと願うというやり方では、どこまでいっても満足は得らず、永遠の蜃気楼を追い求めるだけであろう。こうした「あるべき自分像」の幻影の追いかけという点で、クライドと短編「自由」の主

人公は同一人格である。クライドが追い求めているのは、現実の富や愛ではなく、図式の蜚気楼である。彼が抱く「金持ち」像にしても、「遊ぶことが仕事」、「金持ちは会社に遅く来て早く退社し、残りは果てしない楽しみを享受するだけ」、「金持ち世界はパーティとダンスと別荘でのゴルフにテニスにキャンプだけ」等々の認識は、現実遊離の甚だしい幻想である。彼は、大金持ちのソンドラと結婚しさえすれば、こうした楽園状態に入れると確信し、この思いが揺らぐことは一度もない。しかし読者の目から見れば、果たしてこの結婚がどのような幸せをもたらすのか、巨大な疑問符を付けざるを得ない。何故なら、ソンドラは自分しか愛せない自己中心主義者で、また貧乏人（名門の金持ちでない人間）などに関わることは当初から拒否する女であり、クライドは自分の出自も現在の経済力も、彼女に嘘をつきまくって（彼女のグループが皆大学出たと知ると、自分は断片的な学校教育を15歳までしか受けたことがないが、知っている大学の名前と、聞いたことのある専攻名である数学を思い付き、その大学で数学を専攻したと言おうと考えるし、父親がホテル・オーナーだという嘘もつき続けている）、ようやく彼女の関心を繋ぎ留めているだけで、クライドの犯罪と貧乏人出自という実質が露見するや否や、彼女はさっさと自分の領域の中に入る。ここで私が言っているのは、大学を出ているか否かが問題だということではなく、すぐに露見するに決まっている嘘だけで塗り固めた自己像は、結婚したら早晚破綻するということである。しかしクライドはこのようなことは「全く考えず」に、実質が皆無の嘘で自分を塗り固めている。実質がないのに嘘で自分を偽装するというのは、「被害者の実態を自分が負っていることの否認」衝動であろう。彼の関心は、実態が何であるか、何になるか、ではなく、むしろそれを拒否して「自分を何に見せかけられるか」ばかりに向かう。彼において重要なのは、実態ではなく見せかけであるが、これは自分の実態を否認して、他者（加害者）のイメージに合致させるという観念に憑かれているためである。だから、彼にとって、ソンドラのように見せかけにこだわる人物こそが、理想の女になる。

こうしたソンドラをセックス対象でないことをもって崇め抜き、一方性関係をもった女を「顧慮なく遺棄して良い」蔑みの対象とすることを見ても、ドライサーの当時の性道徳への反発（そしてクライドの無罪化）が、都合の良いところだけを利用する中途半端なものにすぎないことは明白である。

5

以上、『アメリカの悲劇』を中心に、ドライサーの世界の特異性の一端を解き明かしてきた。この小説におけるクライド無罪説の根拠の一つが、「ロバータを殴ったのが故意ではない」ことであるが、殴るのをためらっている間も、相手への殴打を強力なものにするため、手にはカメラを握りしめたままであり、「お前なんかと絶対に結婚しないぞ」との憎悪と拒絶に満ちた決意は変わっておらず、そしてこの決意がある以上は「殺さなければ」済まないのだから、これは無罪の根拠にはならないのではないか。ボートを転覆させたのは、ロバータではなくクライドであること、それにもかかわらず「偶発的な事故」という言い訳で、溺れる女を見捨てていることも、彼の「無罪主張」に疑念を抱かせる。女を殺すことを正当化する視点からだけで、この小説が語られること、自分がロバータ殺害に対

して罪があるとは思えないとクライド（そして彼を支持するドライサー）が信じていることは、恐ろしい。これはとても恐ろしい小説である。

私は本論でドライサーの特異性を述べてきたが、私は「普遍的ではなく特異であるから、この作家／作品は劣る」という観点で言っている訳ではない。あらゆる作家がそれぞれ特異なのであって、特異性は作家の独自性の証である。そして、人間相互の信頼関係を築けないどころか、それを叩き潰す形の固定観念に束縛されるようになった大元まで見るなら、固定観念自体が「ドライサーの悲劇」だったと言える。このような固定観念に呪縛されるしかなかった人物が、その呪縛観点の世界観／人生観を必死になって描き上げたからこそ、希有な迫力ある小説世界が実現したのである。

引用・言及文献

Dreiser, Theodore, *An American Tragedy*, A Signet Classic, 2000.

——, *The “Genius”*, New York and Scarborough, Ohio; New American Library, 1981.

—— *Theodore Dreiser: Best Short Stories*, Elephant Paperbacks, Ivan R. Dee, Inc.; Chicago, 1989.

Warren, Robert Penn, *Homage to Theodore Dreiser*, Random House, New York, 1971.

——“Introduction to *Sister Carrie*,” Theodore Dreiser, *Sister Carrie*, A Norton Critical Edition; New York and London, 1991.

Moers, Ellen, *Two Dreisers*, The Viking Press; New York, 1969.

フロイト, アンナ, 『自我と防衛機制』(黒丸正四郎・中野良平訳), 岩崎学術出版社, 1982.